

月刊

# いじろのとも

第十卷

二月号

## 愛としつけ

子どもにとって

親の

無意識の他己が

愛

意識の他己が

しつけ

愛は

目をかけるが

手をかけないで

見守ること

子どもの自主性を

認めること

それで

子どもの自己が育ち

しつけによって

他己が育つ

愛がないとき決して

自己も

育たないし

他己も

育たない

# 人生を考え直して

## みたい人は（六一）

『正法眼蔵』解説（五）

現成公案を続けます。

諸仏のまさしく諸仏なるときは、自己は諸仏なりと覚知することをもちあらず。しかあれども証仏なり、仏を証してもゆく。

身心を拳して色（しき）を見取し、身心を拳して声（しょう）を聴取するに、したしく会取すれども、かがみに影をやどすごとくにあらず、水と月のごとくにあらず、一方を証するときは一方はくらし。

玉城康四郎氏の現代語訳は、次の通りです。

諸仏がまさしく諸仏なるときは、自己は諸仏であるという意識はない。しかしながらさとしていく仏である。だから仏をさとしていくのである。

身心をかたむけて色に見入り、身心をかたむけて声に聞きほれるときに、自分ではよく会得している

のであるが、しかしそれは、鏡に影がやどり、また水に月がうつるようにはいかない。一方を実証するときは、ただ一方だけであつて、他方は見えない。

諸仏のこころや行動のあり方と諸仏に至らない衆生のそれとの対比が述べられています。

まず、諸仏の行動やこころのあり方ですが、これは、皆さんには体験のないことですから、聞いてみても、殆ど理解することはできません。多くの解説書がいいかげんなことを書いています。

仏の境地に達しますと、日常、自分が仏であることを自覚・認識しよう、などとしなものなのです。そんなことをしないで、自分が仏であることはよく分かっているのです。あるこころの状態や行為が、果して仏の境地になつたものなのか、それから外れたものなのか、といったことを一々反省することをしないのです。あるがままにあつて、それでそのまま仏そのものなのです。すべてが、仏の境地（仏法）になつていのです。弘法大師は、師匠の恵果和尚を称して「行住坐臥が法になう」と言われましたが、まさに、このことを仰つていのです。

そういう境地は、自分のためにする行為がすべて、なくなつていくということなのです。あらゆる行為が、す

べて他者のために為されるのです。

こう言いますと、ご飯を食べたり、水を飲んだり、眠ったりする行為までがそうなのか、と反論されるかもしれませんが、そうなのです。自分の生命を維持するためには、当然、食事や休息が必要ですが、自分が生きていくのは、他者の幸せのためであって、自分の幸せを追求するためではないからなのです。ですから、決して自らの警沢を追求することはできません。命をつなぐ最低のもので、十分満足することができるとは思いません。

また、誰からも愛や支持や承認をもらいたいとは思いません。それをただあげるだけなのです。ですから、どんな淋しい場所、世間の人たちの消息の聞こえてこない、人里離れた場所も、その人にとっては、天国なのです。仏の境地はこのくらいにして、次に衆生のこころについて見てみたいと思います。

私たちは、一般に、何かを見たり聞いたりしようともしくろんで、そうします。その結果、それが何であるかを知ることができません。そして、現代人は特に、それが、いやそれのみが真実だと思っています。

でも、ほんとうにそうなのかと、道元は引用の文で、言っているのです。

なぜなのか。それは、その見たり聞いたりしたもの

何か物理現象を鏡に写したり、月が水に影をおとすように、客観的に行われていないからなのです。「一方を証するときは一方はくらし」だからなのです。

人間は悲しいかな、気付かない間に「自己」への執着を強めています。その執着とは、譬えで言えば、ここに掛けた色眼鏡です。そして、難儀なことに、人間はその色眼鏡を通してしか、物を見たり聞いたりできませんし、また、自分では、そのことに気付けないのです。

たとえば、ある草を見たとき、私たちは、それが自分に役立つかどうかを、すぐ判断してしまいます。そして、役立つものなら大切にしますが、そうでないなら、無視するか、踏みつけてしまいます。それは、草だけではありません。「物質」も「生命」も「人間」すらもそうしているのです。それら全ての存在を、一方化（相対化）し、何らかの価値判断をもって見てしまっているのです。

しかし、この世に無駄なものは何にもありません。すべてのものが、仏の現れなのです。私たち人間が、傲慢になつて万物の霊長なぞと、すべてを人間の価値基準でしかつて、有用かどうかを決めているだけなのです。

おそらく、そのうち自然は破壊されてしまい、それが人間に返すべ返しをすることだと思えます。それが、道元の言う「一方を証するとき一方はくらし」なのです。

「一方を証するとき一方はくらし」とならないためには、どうしたらよいのでしょうか。実は、仏の境地に達するとき、それを脱することができるのです。それは、私の理論で言いますと、「自己」への執着を捨て、「他己」との統合をはかることなのです。そのとき、環境も自分も一体となつて、あるがままに捉えることができるようになるのです。

そのとき、自分に執らわれてものごとを捉えなくてもよくなります。自分の都合で、見なくてもよくなつてきます。あるものをあるがままに見ることができるようになります。

物質も生命も人間もみんな自分と一体だと、実感することができるようになるのです。

現代人は、自己の生命への執着が極端に強くなつていきます。人間の生命なら無駄にでも延長させます。しかし、動物の生命は無駄に殺しています。鯨を食べてはならないという者が、毎日のように牛を殺し、食べています。現在、先進国が家畜の肉を食べるのを十%儉約して、その餌となつているトウモロコシを、発展途上国の飢餓のために回せば、全ての飢餓が解決すると言われるほどです。しかし、美味を追求する人間の贅沢は、とどまるどころをしりません。いま、発展中の国にも、どんどん肉

食の習慣が広まっていますので、早晚、先進国並みの消費量になることだと思えます。自然はとどまるどころなく破壊されて行っています。

これは動物（生命）を殺すことだけではありません。物質もそうです。生活の快適・利便・享樂のためには、化石燃料をかなり浪費しています。そのため、炭酸ガスが地球温暖化をもたらしています。それを国際的な約束で規制しようとしています。先進国の利権を守りながら、発展途上国をも規制しようとする約束など、達成できるわけがありません。これは、化石燃料という一例にすぎません。ダイオキシンの、核燃料、核爆弾、その他人間が人工的に作りだしたあらゆる物質が、人間の自由な利用によつて、蹂躪されているのです。

また、人間も、世界中方々で対立しています。民族と宗教の対立はとて解決しそうにありません。人権の世紀と呼ばれています二十一世紀が、間もなくきますが、人が真に尊重される世紀が果して訪れるのか。いまのような国連の理念ではとても、実現できるとは思えません。人間が自己に閉じて（一方的な）尺度となるのではなく、あらゆるこの世の存在を絶対的に平等なものとする、釈尊・老子・ソクラテス・キリストの四聖の教えに則つて生きることを、広めなければならぬと思えます。

## 自作詩短歌等選

### 向社会体験の欠如

HELPING

(援助)

SHARING

(分与)

CARING

(世話)

自分を

捧げるといふ

人間にしかない

これらの体験が

いま

子どもに

欠けている

実は

大人に

欠けているから

なのだが

### 知ることと行うこと

あたまで

知ることと

からだで

行えることとの

間には

超えがたい

溝がある

その溝を

埋めるものは

ただ修行あるのみ

### こころの闇

世間では

いま

こころの闇が

ささやかれている

それは

現代人が

他己を喪失

しているということ

### 厳粛な儀式の喪失

いま

厳粛な儀式が

なくなり

共に

はしゃぐことでしか

連帯を感じられなく

なっている

## 無明の闇とジャングル

人々が  
無明の闇を  
さまようのは  
ジャングルで  
道に迷った  
旅人のように  
自分では  
真つ直ぐに進んで  
いるつもりで  
同じところを  
ぐるぐる回って  
ジャングルから  
でられず  
ついに死に至る  
ようなもの

自分では

善いことをしていると

思つて

悪いことばかりし

ついに死んで

地獄に落ちるように

### なぜか欲求不満

現代人は

経済生活には

満足しているのに

なにかしら

欲求不満で

被害者意識が

とても強い

なにかに

飢えているのかなあ

## 初発心時 便成正覚

禅宗のことばに

初発心時

便成正覚

というのがあ

これは

発心したとき

すでに

悟りに至っている

という意味

でも

そのためには

ひたすら

戒・定・慧

を守らなければならない

## 年中無休で生きる

時には

休みたい時も

あるのですが

年中無休で

生きてます

日本人

## 個性的とは

人が

あの人は個性的だ

と言うとき

そこには

アブノーマルという

意味が含まれている

# 自作随筆選

## ニューメディアの呪文

朝日新聞の「論壇」欄は何らかの専門家による論考を載せる欄なのですが、一月二六日（火）のそこは、「ニューメディアの呪文と若者」と題する記事でした。その記事の筆者は、メディア論が専門の東海大学教授の萩野弘巳という方でした。

出だして、カナダの文明批評家、マクルーハンの『メディア論』（みすず書房刊）からの引用が出ていました。それは次のようなものです。「生徒たちは一瞬も、新聞をはじめとする公共の伝達手段が、卑劣な意図のもとに用いられ得るといふ考えを認めることができなかった」。続いて、この引用にあるようなことを、実際に、ご自分も大学での授業を通じて体験していることが、紹介されています。

そして、そうした現状を指摘した部分の最後には、次のような記述があります。

ニューメディアでコミュニケーションが容易になり、拡大すれば、人は人との現実的な出会いを失い、

内にこもり、人見知りが激しくなる。しかし、赤ん坊が母親との肌の触れ合いを必要とするように、社会的動物である人間は孤独に耐えられず、友を求め、そして、寂しい人間はサイバースペースの外に友を見つけることができず、仮想現実上の、いやそれどころか犯罪的な意図を隠した他人を信じるにいたる。

なぜ見ず知らずの人が勧める薬（実は毒）を簡単に飲むのかと言われるが、感性・感覚のみ個人的になり、自分が主人であるのは自分の感性に対してだけの現代人は、他人に受け入れてもらうためには簡単に自分を捨てるのである。

この記述は、私が、先月号の随筆「文殊の智慧」でも書いたことでもあり、現実認識はかなり正しいと思えます。ただ、すこし私の考え方とは違う点もありますので、補足しておきます。それは、後半にある「感性・感覚のみ個人的になり、自分が主人であるのは自分の感性に対してだけの現代人」ということですが、これは間違いで、私の理論でいいますと「自己」全体が個に閉じているのであって、感性や感覚だけではありません。自我も認知も感覚も情動も、すべてが個に閉じているのです。ですから、社会（他者）に定位することができず、常に他者

の支持や承認や愛を求めています。自分は与えることができないう人ほど、それを求めているのです。ですから、少しでも甘言を弄されると、すぐにその人を善い人だと思ってしまう。そして、その人のいいなりになってしまうのです。

でも、ここまででは、この著者もまあ、いいのですが、この次の記述がきわめて問題なのです。それは、次のようなこの傾向の阻止策にあります。

・・・ここでもマクルーハンの「メディア論」が参考になる。「少なくとも批判的意識と警戒という偉大な伝統が、権力の卑劣な使用を防ぐ安全装置として有効であることが立証されている」

平凡な結論である。しかしコトバ（国語）による表現力と認識力をつける教育を強化し、イメージ世代と言われるような雰囲気的な感性に加えて、自己認識を強固にすること。言い換えればメディア・リテラシー（情報を識別する能力）をすべての若者に自ら考えさせるようにすることが、現代の呪文を解く、唯一の可能なワクチンである。

この引用の出だしの「批判的意識と警戒という偉大な伝統」ですが、実は、これこそ現代民主主義の根幹をなすものであり、また、現代の問題状況を生み出す根幹で

もあることが、どうも、この著者には分かっていないようです。いま、若者が、社会に定位できなくなっているのは、人を信じず、常に人を「批判的意識と警戒」の目で見ていくからなのです。人が安定できるのは、人を信じ、こころを開いて、人に愛を奉仕（お布施）し、人から感謝されるときだけなのです。

次にあるように「国語による表現力と認識力をつける」でも、けっして社会に定位できるようにはならないのです。実は、ますます社会に定位できなくなっていくのです。なぜなら、それは、ますます自己への執着を強める道だからです。人間は、自分が表現力や認知力をつけたと思えば思うほど、傲慢になり、自己を肥大させるからです。認知能力はこころの垢でしかありません。それを付ければ付けるほど、こころの垢を磨いて落とす修行が必要なのです。社会に定位するのは、こころの働きである「人の心を感じるこころ（感情）」にあるのです。それは、「こころを磨かなければ働くようにならないのです。無意識に宿す「仏さま」を磨きださなければ、本当には働くようにならないのです。」

民主主義の社会では、それを無視することを奨励しているのです。自らの判断だけが、それも損得・好悪の判断だけが大切にされているのです。



## 釈尊のしとば(七七)

法句経解説

(二六八・二六九)ただ沈黙しているからとて、愚かに迷い無智なる人が 聖者 なのではない。秤を手にもっているように、いみじきものを取りもろもろの悪を除く賢者こそ 聖者 なのである。かれはそのゆえに聖者なのである。この世にあつて善悪の両者を(秤にかけてはかるように)よく考える人こそ 聖者 とよばれる。

聖者とは、どういう人なのか、について述べています。まず、沈黙しているからとて、そうなのではない、とあります。聖者が必ず沈黙している訳ではありません。聖者は沈黙しようと思えば、沈黙してることができるといことです。普通の人の中には、会議などで沈黙しておこうと思つても、議論が白熱してくるとつい発言してしまう人がいたり、発言しなければと思つていても、多数意見におされて発言できずじまいの人もあります。でも、聖者は、沈黙も発言も自分の思うとおりにできる人だといえます。

沈黙で思い出しますのは、真言宗高野山金剛峯寺(こ

んごうぶじ)の座主となつた覚鑿(かくばん)上人(興教大師)が、座主職をめぐる争いをきらい、高野山の密厳院にこもり、千日無言行を修したことです。まさに千日間沈黙を守つたということです。普通の人には、出来ないことです。

次に、聖者は、いみじきものを取り、もろもろの悪を除く賢者である、とあります。つまり、その次にありますように、善悪の両者を秤にかけてはかるようによく考える人である、ということですが。

これは、善いことをして、悪いことはしない人ということになります。

なんだ簡単なことではないか、と思われるかも知れませんが、これほど難しいことはないと言えるほどです。たとえば、仏教の真髄は「七仏通戒偈」に表されますが、それは、既に(第七卷一二月号)、偈(一八三)で示されました。「すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること、これが諸の仏の教えである。」

悪しきことを為さず、善いことを行なう。このことが宗教の全てなのです。ただ、そうするためには、こころを磨き、浄めなければならぬ、とするところに仏教の特色があります。

現在、こころを磨くことの意味がほとんど顧みられなくなっています。学校教育は「あたま」ばかりを重視していますし、その結果として、子どもたちは理屈は言えても、人の心が感じられず、正しく実行のできないような子ばかりが育っています。つまり、それは、結局、悪を為すことになっていくのです。善は人の心を大切にしたら行為ですし、悪は、自己へ執着した行為だからです。

(二七〇) 生きものを害うからとて 聖者 なのではない。生きとし生けるものどもを害わないので 聖者 と呼ばれる。

「生きものを害うからとて 聖者 なのではない」とは、分かりにくいかもしれませんが、生きものとは、訳者の中村元先生の注釈によりますと、敵のことだそうです。ですから、敵をやつつけるからとて聖者ではない。「生きとし生けるものどもを害わないので」聖者と呼ばれる、というわけです。

仏教の五戒の一番最初は、不殺生戒です。この不殺生戒には、殺すことだけでなく、傷つけることや、脅すことも含まれています。ですから、この戒律に反するものは、どんな理由があっても、聖者とは呼ばれないわけ

です。

この偈は、現在では「生きとし生けるもの」ではなくて、「この世に存在するすべてのもの」とならなければなりません。現代人には、その一つひとつの全てを尊重することが求められているのです。釈尊の時代には、ものを粗末にする人はほとんどなかったでしょうし、警沢をしようにも不可能だったでしょうから、「生きとし生けるもの」を大切にすればよかったのですが、今では、「この世に存在するすべてのもの」を大切にする必要がありません。そうしないと、早晚、人類は滅亡することでしょうから。

(二七一・二七二) わたくしは、出離の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによっても、また博学によっても、また瞑想を体験しても、またひとり離れて臥すことによっても、得られないものである。修行僧よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

出だしの「わたくしは、出離の楽しみを得た」という部分の「出離」ですが、一般にはなじみのない言葉です。でも、仏教では、煩惱を去って悟りの境地に入ること

表す言葉として使われています。

出離の「楽しみ」を得たとありますが、まさに出離をすることは、これ以上ない楽しみなのです。真言密教では、それを、「大楽」と呼んでいます。それは、真言密教がめざす究極の境地で、普遍絶対なる大安楽なのです。

ですから、「それは凡夫の味わい得ないもの」なのです。口でいってみても、理解できない境地です。そこに達した者のみが分かる境地なのです。ですから、その境地のことを、凡夫でしかない坊主や、仏教学者や、新宗教の教主などが、語りますと、多くは間違いを犯してしまいます。でも、残念なことなのですが、その間違いは、その境地に達したもののみが分かることなのです。ここに宗教の難しさが存在するのです。

では、その出離の楽しみはどうしたら得られるのであろうか。それが、次に述べられています。

それは、たとえば、戒律や誓いを守るだけでは得られないものだ、とあります。戒律には、いつも挙げています五戒があります。また誓いは、一般の方はされないかもしれませんが、坊主は常にしています。真言密教以外の顕教では、四弘誓願というのがあります。それは、衆生無辺誓願度、煩惱無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成、です。また、密教では、五大願とい

うのがあります。それは、衆生無辺誓願度、福智無辺誓願集、法門無辺誓願覚、如来無辺誓願事、菩提無上誓願証、です。こうした、戒律を守り、誓願をしているから出離を得るのではないということです。

次に、博学によっても、得られないということです。現在は、昔に較べれば、あらゆる人が博学になっていますが、ますます、その執らわれの垢は蓄積されて、いまやその弊害が顕著になっています。

次に、瞑想を体験しても、得られない、とあります。それは、坐禅という瞑想をしている多くの僧侶の殆どが出離していないことをみれば明らかです。

次に、ひとり離れて臥すことによっても、得られないとあります。人里は離れて、一人暮らしてみても、出離できるわけではありません。

最後に、「修行僧よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな」とあります。勿論、これまで述べたように、戒律を守り、誓願を新たにし、仏の教えを学び、瞑想をし、一人静かに祈りをするには、とても大切なことです。しかし、それらをする目的は、無意識のこころの垢を落とすことにあります。垢が落ちない、つまり、汚れが消え失せない限り、油断しないで、常に、修行し続けなければならないのです。

後記

一、寒い日が続きました。何年ぶりか、疲労が重なっていたせいか、不覚にも風邪を引いてしまいました。三日間は、三十八度台の熱がし、何もする気がしなくて、じっと寝ていました。いま熱はほとんど下がりましたが、頭痛を感じています。

二、大学に置いていた本を、家の近くにもって帰りました。お借りしている畑に、約二十平米の物置を置かして頂き、そこに入れました。学生さんに手伝っていただきました。ありがとうございます。

三、先日、ふとしたことで、枸杞(くこ)の木を見つけました。お借りしている畑のそばの池の土手にありました。真っ赤な実がなっていて、食べてみましたら、甘い味で、これは枸杞かもしれないと思い、折ってきて図鑑で調べましたところ、その通りでした。

四、実は、五、六年前だったでしょうか、阿南市にお住まいの、「タンニン学説」で有名な片田薬品社長の片田一郎さんが『ここらのとも』に「健康のもと」と題するお便りを寄せてくださいました。その当時、片田さんが書かれた本を何冊か頂いたのですが、その中に『百歳まで生きる原理』と題するものがあります。その本に枸杞のすばらしさが紹介されていて、私も枸杞を栽培しよう

と思い、探したのですが、その時は見つからずじまいで、そのままになっていました。

五、それが、先日身近に見つかって、びっくりしました。今年は、挿し木で増やしたいと思っています。お茶にして飲んだり、実を枸杞酒にしたりして飲むようです。

六、二月五日に、全同麻名郡連女性部役員学習会で「なぜ人間は差別意識をもつのか」と題して講演させていただきました。短い資料を作り配付しました。話の後で、質問がありました。それは、いまの若者の現状をどう考えるか、というものでした。六十歳以上の方々は、多くは的確な問題意識をもたれています。

月刊 ここらのとも 第十卷 二月号 (通巻 一一号)	平成十一年二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

